

「素直な心」について

松下理念副主任研究員 大江 弘

「素直な心」の初出は…

「繁栄」「生成発展」と続いたこのシリーズ。今回は「素直な心」の淵源について見ていきたいと思えます。

昭和五十一年三月、NHK総合テレビの番組「この人と語る」で、松下幸之助は次のように述べています。

「私は素直ということをや、やかましく言うてゐるんですよ。というのは、自分の体験からいっても、素直な人はいちばんうまく仕事をします。この人は素直な人やなと思う人ほど仕事はうまいですよ。素直な心になればね、やっぱり実相が分かるわけですよ。それで、私は標語にしました。『素直な心はあなたを強く正しく聡明にします』と。強く正しく聡明になるんや。だから、素直な心がなかったらいかん」

改めて言うまでもなく、この「素直な心」はPHPの活動を考える上できわめて重要な言葉です。それでは松下は、いつからこの「素直な心」という言葉を使うようになったのでしょうか。「素直な心」の「素直」は、一般的に使われている「素直」とは意味が少し違います。このことは『PHPのことば』の次のような説明からもあきらかです。

「素直な心とは、正直にして寛容な心、我執も偏見も妬みも憎しみもない心、ひろく人の教えを受ける心、分を楽しむ心であります。かつ静にして動、動にして静の働きある心、真理に通ずる心であります。素直な心が成長すれば、心の働きが高まりものの道理が明らかになって、実相がよくつかめます。またそのなすところ融通無碍、ついに円満具足の人格を大成して、悟りの境地にも達するようになります」

それでは、初めて松下がPHPでいうところの意味で「素直な心」という言葉を使ったのは、いつのことなのでしょう。

前出の『PHPのことば』が発刊されたのは昭和二十八年

のことですが、「素直な心」の言葉が公に発表されたのはそれより前の昭和二十三年四月のこと。つまり松下は、その頃にはすでに今日のような意味で「素直な心」という言葉を使っていたわけですね。

そこで、そこから順に遡りつつ文献に目を通していきますと、「素直な心」という言葉が出てくる最も古い資料は、昭和二十三年二月一日の大阪市立愛珠幼稚園での講演録であることがわかります。松下はここで初めて「素直な心持ち」という言葉を使い、PHPを一言にしていうと、素直な心持ちになる運動であると思つたのです。素直な心持ちになれば総ての真理がわかるんじゃないか、物の道理がわかるのじゃないか、物の実相というものが素直な気持ちになればわかるのじゃないか、という感じがするのです」と話しています。この講演以前には「素直な心」という言葉は見出せません。したがって、資料的にはこの講演の時が「素直な心」の初出と言つてよいと思えます。

「素直な心」以前

しかし、ここで不思議なことに気がつきます。一般的にある言葉がある特定の意味内容を持つに至るまでには、いくつかの発展段階を踏むのが通例です。ところがこの「素直な心」の場合、何の前触れもなく突然、一般的なそれとは異なる特殊な意味を含む言葉として使われ始めているのです。

突然の閃きによってある特定の意味を持つものとしてその言葉を考え出したというのであれば別ですが、そうでない限り、やはりそこに至るまでには何らかの発展段階があるはずですね。そうなるのであれば考えられるのは、「素直」という言葉自体は後でつけられたもので、言葉の前に意味内容だけが先行して構築されていたのではないかと、ということですね。

そこで、「素直な心」の意味内容と同様のことを述べている資料を戦前に遡って探してみると、確かにいくつかの考え方を発見することが出来ます。

「正確な判断力を持つ」ということは、人として最も必要である。製造家が物を考案製作し、商人が物品を仕入れ販売するにあたって、これなくしては決して効果をあげえないのである。されば、自分の仕事に最善の注意をはらうはもち

ろん、他人の言うことなすことも、とつてもつて参考となるべきことは、たとえ好感のもてない人の言動であつても、どしどし取り入れて判断力養成の資とすべきである」

これは昭和八年六月三日、松下電器の朝礼での話ですが、「正しい判断がはつきりと下せる」「ひろく人の教えを受ける心」という「素直な心」の意味やその効用に通じるものと言えるでしょう。

また、昭和八年八月十六日の朝礼では次のように述べています。

「一の善を知つてただちにその一を実行し、しだいに十を知つて十を行なうの域に達したいものである」

これなどは、「なすべきをなす」という「素直な心」の効用として語られているものに通じるものです。

「的確なる認識、これは我々の事業の上においても最も必要なことであつて、いかに努力するも誤つた認識の上になされるときはムダであり、失敗に終わるものである」

これも昭和九年三月三十日の朝礼での話ですが、「物事の実相をつかむ」という「素直な心」の意味に通じるものと言えるでしょう。

これら以外にも、欲にとらわれず分相應を心がける大切さ、小我へのとらわれを捨てることなどが、戦前において松下の口から語られています。いずれも、「素直な心」の「とらわれない」「分を楽しむ」という意味に通じるものと言えるでしょう。

以上のことから、松下が、「素直な心」へと通じるものの方考へ方について、それとは意識せず戦前から考えていたことは確かかなようです。おそらく何年もの間、日々の仕事や体験を通して、いろんな考え方が浮かんで消え、消えては浮かびましたことでしょう。そして何が大切なことなのか、どのようにものを見るべきかなど、自分なりの思想を築いていったに違いありません。

「素直な心」という言葉そのものが、いつ、どのようにして見出されたかは明確ではありませんが、少なくともその意味内容については、松下によって何年も暖められ、検討されていたことは確かです。それゆえ「素直な心」とは、松下の思想の一つの結実した姿だと言えるかも知れません。